Department of

INTER-MEDIA ART

TOKYO UNIVERSITY OF THE ARTS

東京藝術大学 美術学部 先端芸術表現科 / 大学院美術研究科 先端芸術表現専攻

Department of Inter-Media Art, Faculty of Fine Arts / Department of Inter-Media Art, Graduate School of Fine Arts

2021

先端芸術表現科の理念と目標

先端芸術表現科が1999年に創立されてから20年以上が経ちました。広くメディアを横断する現代の芸術表現と人材育成をめざし、さまざまなプロジェクトを通して、地域とグローバル社会を結ぶ実践に、精力的に取り組んでまいりました。本学科の卒業生は多岐にわたっています。表現者として活躍する人材はもちろんですが、アートと社会を結ぶ仕事に就く者、また海外で活躍する者を輩出しています。私たちは「もっとも先鋭的な学科」であり続けたい。また、革新と伝統の継承との関係について探り続けたい。この航海に乗り込まんとする意欲にあふれた新しいメンバーを迎え入れたいと心から願っています。

Department of Inter-media Art – Goals and Principles

More than 20 years have passed since the Department of Inter-media Art was established in 1999 as the most leading and challenging department in the Tokyo University of the Arts. The department has been vigorously engaged in a variety of projects that connect the local and global communities with the aim of fostering contemporary artistic expression and human resources across a wide range of media.
The graduates of our department are diverse. We have produced graduates who are not only active as artists, but also those who are working to connect art and society, and those who are active overseas.
We want to continue to be “the most radical department.” We also want to continue to explore the relationship between innovation and the inheritance of tradition. We sincerely hope that we can welcome new members who are eager to embark on this voyage.

Department of Inter-Media Art

FACULTY

Department of Inter-Media Art

MEMBERS

荒木夏実

Natsumi Araki | 准教授 | キュレーター

他者を知ることによって自分を発見し、パーソナルな体験をパブリックな世界とつなげること。それを可能にするのがアートの力です。多様な素材や手法を用いながら、作り、考え、議論し、批評する……先端はこのように総合的な表現力を学ぶことのできる場です。アートを通して自分自身や社会に向き合ってほしいと願っています。

原田 愛

Ai Harada | 准教授 | 舞台美術家

学生時代、より専門的な学びの機会を求めて、私は本学デザイン科を経て大学院では先端芸術表現専攻へ進学しました。様々なアプローチで芸術に関わる教員からの指導、そして学生同士の交流によって、「メディアを横断する」ことの豊かさ、面白さを知りました。私の創作活動は、この時の経験が原点となっています。みなさんと一緒に、創造性について深く思考する場を作りたいと願っています。

小沢 剛

Tsuyoshi Ozawa | 教授 | 美術家

例えばキリの先っぽが先端であるためには、その後ろに伸びる鋼鉄（スチール）は美術の歴史、あるいは人間の想像力だ。更にその鋼鉄を支える丸く優しい木製の柄は、地球の回転か宇宙のゆらぎだ。それらの力を借りて、キリの先っぽは時代に風穴を開けてゆくのだろう。やがてはキリの先っぽは摩耗してくる。キリの先っぽは常に鋭利で無くてはならない。

佐藤時啓

Tokihiro Sato | 教授 | 美術家・写真家

先端創設時から参画した。本学彫刻科出身者として当初は戸惑うことも多かった。しかし今は確実に言える。「なぜそのメディウムで表現するのか?」ということが対照化され、社会との関係性、そして芸術の置かれた立場などについて客観視できる場所。作ることと考えることの両輪を実現し実践する現場。先端はそんな場所なのだ。

鈴木理策

Risaku Suzuki | 教授 | 美術家・写真家

ひとつの表現形式を学ぶことは、その技術を知り、高い表現性を目指してゆくものだと思います。ただ、自分の表現したいものがひとつの形式に収まるとは限りません。変化し続ける世界の中で何を感じ、どう表現するのか。先端はそうした問いに直面する場です。自身の表現を構築するための多様な刺激に満ちていると思います。

八谷和彦

Kazuhiko Hachiya | 教授 | メディアアーティスト

踊ってもいいし、音でもいいし、文章を書いても、写真でも映像でもいい。
……という風に「何を作ってもいい」と言われると、意外と人は悩んでしまうものかも。学生を見ると、たまにそういうことも感じます。けど、そういう風に真剣に悩む時間を人生の中で持つのは、実はとても大事で貴重、と思っているのです。

日比野克彦

Katsuhiko Hibino | 教授 | アーティスト

アートのアートならではのところって、正しい答えがないところのような気がします。その時の自分の考え、その時の自分の表現がその時の自分にとってのとりあえずの答え。でも、それは正解じゃない。だからいつも次のことを考えている。芸大の長い歴史の中で、学生も教員もみんな次の表現のことを考え続けて来ている。そんな中で生まれてきたのがこの科です。先端芸術表現科の学生が考えていくことが次の芸大を次のアートを創ることになっていく。

山城 知佳子

Chikako Yamashiro | 准教授 | 美術家・映像作家

声に重力を感じたり、息に色を感じたり、残響音から過去と現在を繋げたり。カラダで感じる微細な感覚を捉え、信じ、表現し、他者へと繋げてゆく。移ろう社会で自身のカラダが鋭敏に感じ触れる処に先端なるものがあり、そこから一歩踏み出して表現の冒険が始まる。未然の何かに出会う冒険は新しいアートを創り出す力になるのだと思う。

長谷部 浩

Hiroshi Hasebe | 教授 | 演劇評論家

私は、本来の専攻が近現代演出史である。そのため美術系パフォーマンスに限定しない幅広い身体表現を学生とともに探求してきた。また、身体に限らずすべての表現活動は、批評の言葉を鍛えることによって足腰が強くなると考えている。身体や言語に関心のある学生にぜひ志望してもらいたい。

古川 聖

Kiyoshi Furukawa | 教授 | 音楽家・作曲家

先端芸術表現科でいう所の領域横断性とはアートの枠内での移動や組み合わせではなく、アートとアートではないものの間を行き来しつつ、アートの外側の様々な場所に（たとえそれが困難な事であるにしろ）点を打ち続け、そのメタポジションから見えてくる、アート各領域の関係性を探るような、絶え間の無い動きのようなものだと思う。

《NEW YOKU/EVISBEATS》
最後の手段（有坂亜由夢）/ 2018年

《FUTURE PAST》
アルカディリ・モニラ / 2020年

《8848》©Naoki ISHIKAWA
石川直樹 / 2011年

《Ruhe ―夢見る月》竹川市美術作場
及川潤耶 / 2021年 / 撮影：Yoshiya Hirayama

有坂亜由夢 Ayumu Arisaka | http://www.saigono.info/

アニメーション作家。1985年千葉県生まれ。2012年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。手描きのアニメーションと大道具小道具を使ったストップモーションの手法などを融合させ、有機的に動かすアニメーションを制作。TV-CM、MV、広告のビジュアルなど様々な場で発表している。映像チーム「最後の手段」として活動中。MV「やけのはら / RELAXIN'」が文化庁メディア芸術祭2013エンターテイメント部門新人賞受 賞。MV「NEW YOKU / EVISBEATS」が文化庁メディア芸術祭エンターテインメント部門審査員推薦作品、NEWREEL AWARD ブロンズ受賞。

—

アルカディリ・モニラ Monira Al Qadiri | http://www.moniraalqadiri.com/

アーティスト。1983年セネガル生まれ、クウエート国籍。2010年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現領域博士後期課程修了。中東を中心に「悲しみの美意識」やジェンダー問題を取り上げ、石油カルチャーの未来を問う作品を制作している。2013年から「GCC」というアーティスト集団のメンバーになり、翌年ニューヨークのMOMA PS1で個展を行った。現在はベルリンを拠点としながら、世界各国で展示やレクチャーを行う。

—

石川直樹 Naoki Ishikawa | http://www.straightree.com/

写真家。1977年東京都生まれ。2008年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現領域博士後期課程修了。2000年、Pole to Poleプロジェクトに参加して北極から南極を人力踏破、2001年、7大陸最高峰登頂達成。『CORONA』（青土社）により第30回土門拳賞を受賞。著書に開高健ノンフィクション賞を受賞した『最後の冒険家』（集英社）ほか多数。2016年に水戸芸術館ではじまった個展『この星の光の地図を写す』が、新潟市美術館、高知県立美術館、北九州市立美術館、初台オペラシティなどに巡回。2020年『EVEREST』（CCCメディアハウス）『まれびと』（小学館）により写真協会賞作家賞を受賞した。

—

及川潤耶 Junya Oikawa | https://sonifidea.jp/

サウンドアーティスト。1983年仙台市生まれ、ドイツ在住。SONIFIDEA LLC代表。2011年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。同年よりドイツ公営メディア芸術センター「ZKM」の客員芸術家。フィールドワークをベースに、音響体験を通じて空間や環境と人を繋ぐ活動を各国で展開。2019年「ソニフィデア合同会社」設立。JR西日暮里駅コンコース（2020年度グッドデザイン賞受賞）、千葉県市川市新庁舎の音響空間演出（2021年）や企業との社会実験など、芸術技法から生まれた特許の活用やアートを起点とした思想で未来の価値創造を実践している。

—

大山エンリコイサム Enrico Isamu Oyama | http://www.enricoisamuoyama.net/

アーティスト。エアロゾル・ライティングのヴィジュアルを再解釈したモティーフ「クイックターン・ストラクチャー」を起点にメディアを横断する表現を展開し、現代美術の領域で注目される。1983年にイタリア人の父と日本人の母のもと東京に生まれ、同地で育つ。2007年慶應義塾大学環境情報学部卒業。2009年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。2011年にアジアン・カルチュラル・カウンシルの招聘で渡米。2012年よりニューヨークを拠点にする。2021年には東京にもスタジオを開設。著書に『アゲインスト・リテラシー―グラフィティ文化論』（LIXIL出版）など。

—

小田原のどか Nodoka Odawara

彫刻家、評論家、出版社代表。1985年宮城県生。2010年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。原爆碑や占領期の彫刻についての調査をもとに作品制作と学術論文・評論の執筆を行う。主な展覧会に2018年「かたどりの法則」（鞆の津ミュージアム、広島）、「あいちトリエンナーレ2019」、「札幌国際芸術祭2020」（新型ウイルス感染拡大防止のため中止、プランのみ公開）など。『東京新聞』『芸術新潮』『ふぇみん』『ウェブ版美術手帖』『群像』で評論を連載（2021年5月時点）。

《FFIGURATI #162》©Enrico Isamu Oyama
大山エンリコイサム / 2017年 / 撮影：Shu Nakagawa

《A Happy Birthday》
青葉花 / 2020年

《1（1923–1951）》あいちトリエンナーレ2019
小田原のどか / 2019年 / 撮影：平林岳志

《bystander #004》
片山真理 / 2016年

《father》
金川晋吾 / 2009年

片山真理 Mari Katayama | http://shell-kashime.com/

1987年埼玉県生まれ、群馬県育ち。2012年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。主な展示に2019年「May You Live in Interesting Times—58th International Art Exhibition of La Biennale di Venezia 2019」アルセナーレ・ジャルディーニ（ヴェネチア）、「Broken Heart」White Rainbow（ロンドン）、2017年「無垢と経験の写真 日本の新進作家 vol.14」東京都写真美術館（東京）、2017年「帰途」群馬県立近代美術館（群馬）、2016年「六本木クロッシング2016展：僕の身体、あなたの声」森美術館（東京）、2013年「あいちトリエンナーレ2013」納屋橋会場（愛知）など。主な出版物に2019年『GIFT』（United Vagabonds）がある。2020年第45回木村伊兵衛写真賞受賞。

—

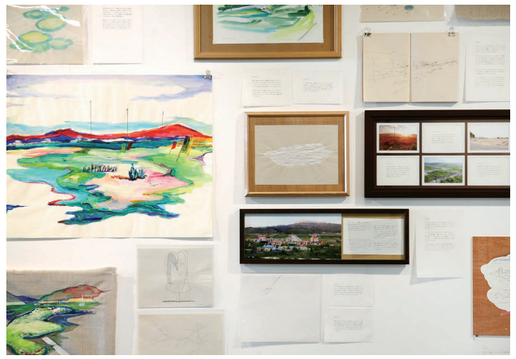
金川晋吾 Shingo Kanagawa | http://kanagawashingo.com/

1981年京都府生まれ。神戸大学発達科学部卒業。2015年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現領域博士後期課程修了。三木淳賞、さがみはら写真新人奨励賞受賞。2016年「father」（青幻舎）、2020年小説家の太田靖久との共著「犬たちの状態」（フィルムアート社）刊行。主な展覧会、2019年「同じ別の生き物」アンスティチュ・フランセ（東京）、2018年「長い間」横浜市民ギャラリーあざみ野（神奈川）、2015年「STANCE or DISTANCE? わたしと世界をつなぐ「距離」」熊本市現代美術館（熊本）など。

—

菅 実花 Mika Kan | http://mikakan.com

美術作家。1988年生まれ。2021年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻博士後期課程修了。2016年にラブドールを妊婦の姿に加工し撮影した修了作品《The Future Mother》で注目を集める。主な展覧会に「黄金町バザール2017」（神奈川）、2019年個展「The Ghost in the Doll」原爆の図丸木美術館（埼玉）。出版・連載に2018年共著『〈妊婦〉アート論』（青弓社）、2019–2020年『本心』作・平野啓一郎（北海道・東京・中日・西日本新聞朝刊）の挿絵。VOCA展2020奨励賞受賞。



《「波のした、土のうえ」in 盛岡》
小森はるか＋瀬尾夏美 / 2015年

《Museum Garage》 マイアミデザイン地区(アメリカ)
ニコラ・ビュフ / 2018年 / 撮影:Yann Delacour

Clavel Arquitectos; J. Mayer H.; K/R, Keenen Riley; Nicolas Buffe; WORK AC.
Curation: Terence Riley / Development: Craig Robins (DACRA) / Architect-of-the-record: Tim Haahs.
Photo: ImagenSubliminal (Miguel de Guzman + Rocio Romero)

《頭がえる公園》 のための アートナイト実行委員会
西尾美也 / 2019年

《海で考える人》
湯浅弁 / 2016年

「Distance わたしの#stayhome日記」
今日マチ子 / 2021年 / rn press

Distance
今日マチ子
わたしの#stayhome日記
rn press

今日マチ子 Machiko Kyo | http://juicyfruit.exblog.jp/ twitter:@machikomemo

漫画家。1P漫画ブログ「今日マチ子のセンネン画報」の書籍化が話題に。4度文化庁メディア芸術祭審査委員会推薦作品に選出。戦争を描いた『cocoon』は「マームとジプシー」によって舞台化。2014年に手塚治虫文化賞新生賞、2015年に日本漫画家協会賞大賞カーツーン部門を受賞。『みつあみの神様』は短編アニメ化され海外で23部門賞受賞。近著にコロナ禍の日常を絵日記のように描いた『Distance わたしの#stayhome日記』等。

—

小森はるか＋瀬尾夏美 H. Komori + N. Seo | http://komori-seo.main.jp/

映像作家の小森はるか(2014年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了)と画家で作家の瀬尾夏美(2011年同大学先端芸術表現科卒業)によるアートユニット。東日本大震災をきっかけに活動開始。2012年より3年間、岩手県陸前高田市に暮らしながら制作に取り組む。2015年、東北で活動する仲間とともに、土地と協働しながら記録をつくる組織・一般社団法人NOOK(のおく)を設立し、仙台に拠点を移す。現在も陸前高田での制作と対話の場づくりを活動の軸にしながら、全国各地へ赴き巡回展を開催。主な作品に「波のした、土のうえ」(2014)、「あたらしい地面／地底のうたを聴く」(2015)、「遠い火｜山の終戦」(2016)、「二重のまち／交代地のうたを編む」(2019)がある。

—

ニコラ・ビュフ Nicolas Buffe | http://nicolasbuffe.com/

アーティスト。1978年フランス・パリ生まれ。2007年以降東京に拠点を移す。2014年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現領域博士後期課程修了。ヨーロッパの古典美術、日本や米国のサブカルチャーの混合をちりばめた作品で知られる。ファッション、建築、ビデオゲーム、オペラのアートディレクション等、美術以外での活動も多い。2014年、原美術館にて個展「ポリフィーロの夢」が開催された。デザインを手がけたビル『Museum Garage』が2018年春マイアミでオープンした。2018年冬東京銀座シックスにて大型作品が展示される。同年フランス芸術文化勲章受章。

—

西尾美也 Yoshinari Nishio | http://yoshinarinishio.net/

美術家。1982年奈良県生まれ。2011年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現領域博士後期課程修了。文化庁芸術家在外研修員(ケニア共和国ナイロビ)等を経て、現在、奈良県立大学地域創造学部准教授。装いの行為とコミュニケーションの関係性に着目したプロジェクトを国内外で展開。ファッションブランド「NISHINARI YOSHIO」も手がける。主なグループ展に、「東京ビエンナーレ2020/2021」など。奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良」プログラムディレクター。奈良県立大学実践型アートマネジメント人材育成プログラム「CHISOU」ディレクター。一般社団法人CHISOU代表理事。

—

潘 逸舟 Ishu Han | http://www.hanishu.com/

美術家。1987年中国上海市生まれ。2012年東京藝術大学美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。現在東京在住。主な展覧会に2019年「アートセンターをひらく」水戸芸術館(茨城)、2017年「The Drifting Thinker」MoCAパビリオン(上海)、「ESCAPE from the SEA」National Visual Arts Gallery(クアラルンプール)、2016年「As far as I know」URANO(東京)、「Sights and Sounds: Highlights」ジューイッシュ・ミュージアム(ニューヨーク)などがある。

—

藤田俊太郎 Shuntaro Fujita | http://www.my-pro.co.jp/aa/fujita.html

演出家。1980年秋田県生まれ。2005年東京藝術大学美術学部先端芸術表現科卒業。在学中の2004年、ニナガワ・スタジオに入る。2015年まで蜷川幸雄作品に演出助手として関わる。演出作に「The Beautiful Game」「美女音楽劇人魚姫」「ミュージカル手紙」「ジャージー・ボーイズ」「Take Me Out」「sound theaterVI,VII」「ダニーと紺碧の海」「ピーターパン」「ミュージカル VIOLET」(日本版/英国版)「絢爛豪華 祝祭音楽劇 天保十二年のシェイクスピア」「ミュージカルNINE」「LOVE LETTERS」「東京ゴッドファーザーズ」。第22回読売演劇大賞優秀演出家賞・杉村春子賞、第24回最優秀作品賞・優秀演出家賞、第28回最優秀演出家賞・優秀作品賞、第42回菊田一夫演劇賞、第42回松尾芸能賞優秀賞受賞。

—

松下 徹 Tohru Matsushita

1984年神奈川県生まれ。オートマッチックに絵を描くシステムを作り出し、それが生み出した図像をさらにコラージュ／編集するプロセスを経た絵画作品を制作している。また2012年よりアートチームSIDE COREの一員としてストリートアートをテーマにギャラリーや美術館、公共空間や廃墟まで様々な場所で展覧会を開催している。2020年にはポストコロナ・アーツ基金にノミネートされた他、Serpentine GalleriesとNOWNESSとK11 Art Foundationの共同プロジェクト「Out of Blueprint」に選出された。主な展覧会に2021年「Under Pressure」国際芸術センター青森(個展)、2021年「水の波紋」ワタリウム美術館、2021年「やんばるアートフェスティバル」沖縄本島北部地域など。

—

宮永愛子 Aiko Miyanaga | http://www.aiko-m.com/

美術家。1974年京都市生まれ。2008年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。日用品をナフタリンでかたどったオブジェや、塩を使ったインスタレーションなど気配の痕跡を用いて時を視覚化する作品で注目を集める。主な個展に、2012年「宮永愛子:なかそら―空中空―」国立国際美術館(大阪)、2017年「みちかけの透き間」大原美術館有隣荘(岡山)、2019年「宮永愛子:漕法」高松市美術館(香川)、2020年「うたかたのかさね」京都文化博物館別館ホール(京都)。2013年「日産アートアワード」初代グランプリ、2020年第70回芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。

—

目 [mé]

個々のクリエイティビティを特性化した、連携を重視するチーム型芸術活動。果てしなく不確かなこの世界の可能性を信じ、その先に鑑賞者の実感を引き寄せようとする作品を展開している。中心メンバーは、アーティストの荒神明香(2009年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了)、ディレクターの南川憲二(2009年同専攻修士課程修了)、インストーラーの増井宏文の3名。主な活動に、2014年「たよりない現実、この世界の在りか」資生堂ギャラリー、2016年「Elemental Detection」さいたまトリエンナーレ2016、2019年「非常にはっきりとわからない」千葉市美術館など。第28回(2017年度)タカシマヤ文化基金受賞。「VOCA展2019」佳作賞受賞。

《ミュージカル NINE》
藤田俊太郎 / 2020年 / 写真提供:梅田芸術劇場

《Cutter》
松下 徹 / 2020年

《life》
宮永愛子 / 2018-19年 / 撮影:木奥恵三

《非常にはっきりとわからない》
目 / 2019年

FRESHMAN

1年次 [テーマ] 自己を知る

1年次では、実技・必修講義など授業を上野校地を基本に行います。様々な専門性に特化したスタッフによるスタジオでの演習授業を中心として、ドローイング、コンセプチュアル・アート、写真、デザイン、工作・立体造形、身体表現、音楽、映像、など、多種多様なメディアの特性を分野横断的に学びながら、表現活動に必要となる基礎的な知識や技術の習得を目指します。また、コンピュータの操作方法、芸術批評や理論、リサーチやプレゼンテーションに必要な語学力も集中的に身につけることによって、基本的な読解力、柔軟な構想力、創造的な思考力を鍛えます。このように、実技と理論の両方をバランスよく学び、多彩な経験を積み重ねることによって、新たな表現を生み出すための能力や素養を身につけていきます。

スタジオ講習「ドローイング」

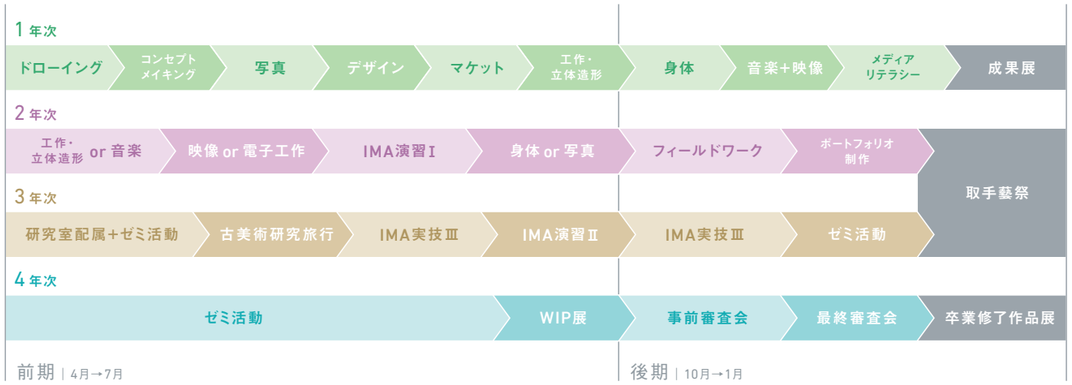
SOPHOMORE

2年次 [テーマ] 他者と外部を知る

2年次では、実技授業を取手校地を基本に行います。前期の「スタジオ選択カリキュラム」では、1年次に学んだ知識や技術を応用し、多様なメディアを選択的・複合的に扱い、独自の表現方法を探求します。後期の「フィールドワーク」では、グループワークを基本として、学外の特定の地域をリサーチし、そこで得られた知識や情報に基づきながら、作品制作を行います。異なる個性や意見をもったメンバーが綿密なリサーチ、議論、交渉を行い、作品プランを実現させる一連のプロセスを学びます。「ポートフォリオ制作」では、画像編集からレイアウト、製本に至るエディトリアルデザインを学び、過去の自分の活動をまとめて他者に伝えるための技術を習得します。さらに、2年次の成果は学生の主体的な企画・運営によって開催されるアートイベント「取手藝祭」で一般公開されます。

スタジオ選択カリキュラム「写真」

美術学部 先端芸術表現科 カリキュラムチャート | 2021年度(参考) ※社会状況に応じてカリキュラムを一部変更する場合があります。



JUNIOR

3年次 [テーマ] 関係をつくる

3年次では、教員別の「研究室」に所属し専門的な指導の下、1〜2年次で学んだスタジオ指導から自分の専門性を模索、思考し創作研究を行います。各研究室の内容は多岐に渡り、個人制作と研究室での活動との両輪をうまく利用して、さらに表現の幅を広げていくことが求められます。また、「IMA実技Ⅲ」で、展示を実践する経験を積み重ねます。2〜3年次に選択履修できる「IMA演習」は、外部から多彩な顔ぶれのゲストアーティストや講師を招いて学年横断的に行なう短期集中の演習授業で、表現に対する知見を広げていきます。「古美術研究旅行」では毎年テーマを設定し、熊野、奈良、京都を中心に日本の古美術を見学します。本科独自の行程により、日本の伝統文化・美術に対する造詣を深めます。

古美術研究旅行

大学院美術研究科 先端芸術表現専攻

修士課程は少人数制による教育・研究環境となります。博士後期課程ではさらに個別の指導を行います。教員が学生に知識を伝達するのは、大学院教育の一面にすぎません。芸術が人々の意識を変革していくにあたって、教員と学生がパートナーシップを結び、その問題の所在を明らかにし、解決のための方策をともに考え創造していく場でありたいと願っています。狭隘な領域に分断すること無く、共通のゼミを設定し、美術に留まらない幅広い関連分野で活躍する多彩な人材が特別講義や演習などに参加し、さまざまな角度からアドバイスを与え、深く表現について学び、研究制作を進めます。
博士後期課程では、自らの専門分野における研究を行います。作品制作や研究発表によって新たな知見を得、それに基づきながら博士論文を執筆します。

SENIOR

4年次 [テーマ] 統合する

卒業制作を中心に、これまでの制作・研究活動を集大成していきます。所属研究室の教員の指導の下、領域横断的理論と実践を鍛えていきます。前期に「WIP(Work In Progress)展」、後期には「最終審査会」と段階を踏みながら進みます。「卒業修了作品展」に向けては個々の作品制作とともに、展覧会の企画運営にも学生が主体的に取り組んでいきます。

—

卒業修了作品展について

集大成の展示である「卒業修了作品展」は、毎年1月に東京都美術館で開催されます。先端芸術表現科ではイベント、広報デザイン、展示配置など、学生が主体となり展覧会を運営します。学生が制作するカタログは毎年趣向を凝らしたデザインと内容になっています。

卒業修了作品展

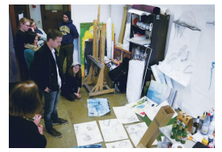
国際交流・留学

先端芸術表現科ではグローバルな視野や国際的に活躍できる人材を育成するため、留学制度を設けています。アジア、欧米の大学に留学し、さまざまな文化に接することができます。海外の留学生の受け入れも行っており、さまざまな国の学生と交流しています。

—

留学生派遣・受入先 [韓国]ソウル大学校美術大学、韓国芸術綜合学校 [中国]中央美術学院、清華大学美術学院 [イギリス]ロンドン芸術大学、ロイヤルアカデミースクール [オーストリア]ウィーン応用芸術大学 [ドイツ]ワイマール・バウハウス大学、シュトゥトガルト美術大学 [フランス]パリ国立高等美術学校 他

美術学部対象校全50校、
うち先端対象機関39校(2021.4.1現在)
右写真：ワイマール・バウハウス大学の授業風景



メディア教育棟 | INTER-MEDIA LABORATORIES

1F | ギャラリー
Gallery

天井高約8mのギャラリースペースになり、電動クレーンも併設しており、大型の作品も展示可能です。板張りの床なので、パフォーマンス等の発表にも使用しています。

101 | リハーサルルーム
Rehearsal Room

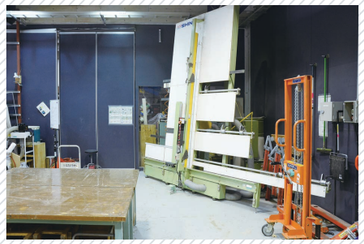
スタジオ講習「身体」等で使用するスタジオです。日頃はパフォーマンス、ダンス、演劇などの稽古にも利用しています。壁一面が鏡張りなので、練習の際にも活用できます。

103 | 写真スタジオ
Photo Studio

電動バンクライト4機、ホリゾントなど設備されています。講習を受ければ、ストロボなど高度なスタジオ撮影が可能です。作品の記録撮影やポートレート撮影などに最適な環境です。

107 | 写真演習室
Photo Laboratory

スタジオ講習「写真」等で使用するスタジオです。暗室を完備しており、現像からプリントまで銀塩写真の技法を体系的に学べます。他にもカラー暗室、大型引き伸ばし機も完備しています。



109 | 工作室
Work Studio

スタジオ講習「工作」等で使用するスタジオです。講習を受けた学生は、設備を使用でき自由制作をすることができます。パネルソーや、溶接機など各種工作機械を設備しており、木工や金工、各種素材の制作が可能です。

201 | 音楽スタジオ
Recording Studio

スタジオ講習「音楽」等で使用するスタジオです。高い遮音性と最適な響きを確保しています。ゆとりある広い空間で音楽関係の授業で使用されるほかにも、生演奏や音声の録音、楽器のレッスンなど学生の多様な制作作業にも対応します。

202 | 音楽プロジェクトルーム
Music Laboratory

音楽スタジオに防音ガラス窓を通して隣接するコントロールルームです。本格的なPA機器とデジタルレコーディング機材を完備し、録音のコントロールから編集作業、マスタリングまでを行なうことができます。

208 | コンピュータースタジオ
Computer Studio

28台のiMac、レーザープリンター、スキャナーを設備しており、映像、音楽、デザインなどの基礎的な授業を行います。授業外は常時開放しており、自由制作が可能です。

307 | 映像編集スタジオ
Image Editing Studio

スタジオ講習「映像」等で使用するスタジオです。実技の映像授業では、映像の基礎となる撮影をレクチャーし、スタジオで編集作業を指導します。映像編集スタジオでは、Premiereなどを使用し、より専門的な編集作業を行います。

308 | メディアデザインスタジオ
Media Design Studio

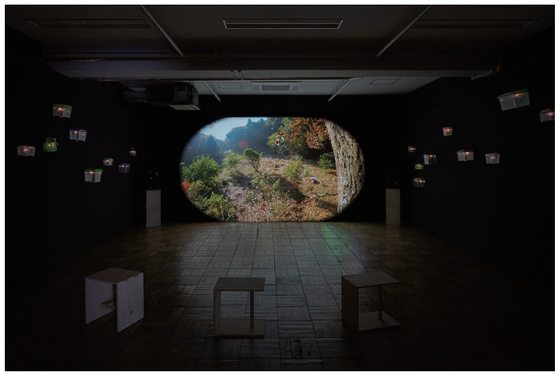
スタジオ講習「デザイン」等で使用するスタジオです。Illustrator、Photoshop、InDesignなど、DTPアプリケーションを使用した制作を行うスタジオです。大判プリンター、カッティングプロッター、各種製本機材等も使用できます。

上野キャンパス | Ueno Campus

1年次の実技、必修講義は上野キャンパスを中心に、美術学部絵画棟1階アートスペースやAMC（芸術情報センター）を使用し、授業を進めて行きます。

Koken Arakawa | INTERVIEW #1

荒川弘憲さん | 2020年度卒業・修了作品展 買い上げ賞



《Jamscape Insectcage》2021年 / ヴィジュアル・サウンドインスタレーション、シングルチャンネルビデオ
サウンド・サウンドデザイン:小野龍一 / 撮影:中川陽介

入学動機について

感覚を形にしたり、いままでにない感覚を誘う芸術がすきでした。だから、詩も絵も壺も景色もへだてることなくいい。

色々みて気づいたことに、言葉や色といった異なるものも、それを知覚するとムードになってしまうことがあります。だから極論、ある詩のなかの「。」と、ある線に感じるムードが同じ、ということもありえてしまう。気になるのはそのムード。表現方法を限定する必要はなかったから、先端は魅力的でした。

—

自分の活動について

集中してなにかを推進するよりかは、日常のアクティビティーのなかで創造力を育てるのが理想です。最近は、大学で飼育している山羊の世話をしたり、山菜をとったりしますが、哲学や社会学の本を読んでそれをすると、経験する世界がより奥深い味わいとなります。その世界の経験から、私、あるいは我々はどこにいて、どのようにあるのか、知れるきがします。

—

受験生へのメッセージ

芸術だけでなく、それより大きなくくりである文化の意味を考えるといいです。文化を、集団や社会での思考や行動のパターンと捉えるならば、この世界には、多くの文化があることでしょう。つまり、家族や予備校、そうした小さな世界より大きな、生命の運動としての文化がある。自分の活動を受験のためと思わずに、そうした大きな運動とつながることの興奮のなかで行うのはどうでしょう。

荒川弘憲 Koken Arakawa
2021年東京藝術大学美術学部先端芸術表現科卒業。現在、同科修士課程在籍。充実から充実へ、よそ見する美術家。宮田亮平賞(2019)、国際瀧冨士美術賞優秀賞(2020)。ウィークエンド藝大食堂2020公募プログラムに採択され、その成果として「はやい足、走査「黄金篇」」(2021)を発表した。

INTERVIEW #2 | Natsuki Matsumoto

《Ghost village fair》2020年 / 野外インスタレーション

松本夏生さん | 平山郁夫賞

入学動機について

昔から絵を描くこと、音楽を聞くこと、体を動かすこと、人と違うことをするのが好きでした。美術高校出身で、高校では油絵を描いていました。一方で写真との出会いや様々なア作品を鑑賞するようになり、そのなかでも現代美術に興味が出てきました。先端出身のアーティストを知ったり、卒業制作などを見て、私の次なる居場所はここだ!と思い志望しました。

—

自分の活動について

身近に感じた社会問題とユーモアをテーマに、映像・パフォーマンス・インスターレーションなどの作品を制作しています。どこかで目にするモチーフやパロディなど、既成のものを再構築することで、自分が考えていることや伝えたいことが作品を通してどれだけ言えるのか挑戦しています。ある種の自分勝手な使命感を感じた時、その事柄をテーマに掲げて制作しているのかもしれません。現在ではライフスタイルであるスケートボードについて日々考えています。

—

受験生へのメッセージ

この冊子を読んだ皆さん、先端がどんな科か分かりましたか?私は当時読んでも分からなかったです。変な話、具体的に何を学ぶのかもよく分からずに受験していた覚えがあります。でもなんとなく、楽しくやりたいことができそうだなって。その直感は信じて良かったです。ここでは様々な表現をする人に出会えます。そこが1番先端の最高なところだと思っています!

松本夏生 Matsumoto Natsuki
1999年生まれ。2018年東京藝術大学美術学部先端芸術表現科入学。現在学部4年次在籍。2019年Jam Photo GalleryでTEAM OBAKE「CLIP1」写真展を開催。2020年ゲーテインスティテュート東京で行われた、ゆめいろさがし公演「ナナ、2020」に出演。同年、宮田亮平賞を受賞。その他にはweeb tokyoというコレクティブに所属しポップアップや展示など幅広く活動している。

DEPARTMENT OF INTER-MEDIA ART

QUESTION & ANSWER

入学試験についてのQ&A

新型コロナウイルス感染症の影響により、次年度の入学試験は右記内容とは異なる場合があります。詳しくは東京藝術大学のウェブサイトを確認してください。

Q | 過去の試験問題を知りたいです。
A | 上野校地の教務課で閲覧できます。東京藝術大学ウェブサイトでも閲覧可能です。

Q | 入学試験の日程を知りたいです。
A | 学生募集要項を確認してください。

Q | 試験場所はどこですか。
A | 修士は取手キャンパスで実施します。学部も取手キャンパスで行います。

Q | 合格者作品の開示はしないのでしょうか。
A | 一部の作品と論文は入試説明会で公開しています。

Q | 試験会場の雰囲気を知りたいです。
A | 試験会場は公開できません。公平に受験できるように照明や空調を整えています。

Q | 総合実技は何を意図した試験ですか。
A | 発想力、判断力、集中力、手を動かす力など「考えること」と「作ること」を総合的に試す試験です。

Q | 個人ファイル作成にあたり、芸術に関係のない活動履歴も含めた方がいいのでしょうか。
A | その活動履歴が、先端芸術表現科で勉強したいことに重要な要素であるかを、自分で判断してください。

キャンパスライフについてのQ&A

Q | 舞台や身体表現について勉強できますか。
A | 身体表現を専門にしているカリキュラムや研究室があります。

Q | アニメーションの企画や制作に興味があるが、映像の演習授業はありますか。
A | ビデオカメラの撮影方法、映像編集などの映像演習科目があります。アニメーションを制作している学生もいます。

Q | 授業中の学生たちの雰囲気はどうでしょうか。
A | 課題制作や藝祭など、1年を通して一緒にいる時間が多いので団結力が強く、良い雰囲気で授業に取り組んでいます。

Q | 海外留学や海外展示する機会などがありますか。
A | 国際交流協定校が多数あり交換留学制度を設けています。ヨーロッパ、アジア、オセアニアなど世界の国々に行き学ぶ機会があります。

Q | 研究室の配属はどのように決まりますか。
A | 3年次の始まりに研究室希望を調整し、配属先を決めています。

Q | 卒業生の進路について知りたいです。
A | 作家、キュレーター、教育関係者、編集者、演出家など、非常に幅広い活動を行っています。入学生は、過去の例や枠組みに捕われていない新しい活動を行う人も受け入れています。

Q | 他の学科との関わりはありますか。
A | 学科を横断して行う授業やプロジェクトがあります。他の学科と一緒に学ぶことや活動する機会があります。

Q | 授業料免除・入学料免除の制度はどのようなものですか。
A | 納付が著しく困難であると認められる者に対し、選考のうえ、授業料の全額または半額を免除する制度があります。入学料に関しても同様に、全額または半額を免除する制度があります。

Q | 奨学金の制度はありますか。
A | 様々な奨学金制度があります。詳しくは東京藝術大学ウェブサイト内の「奨学金」の欄を確認してください。

Q | 先端芸術表現科以外の大学施設の利用は可能ですか。
A | 本学には、付属図書館、共通工房、写真センター、芸術情報センターなどの教育研究施設があり利用可能です。

Q | どのような資格が取得できますか。
A | 教育職員免許状、学芸員資格が取得可能です。

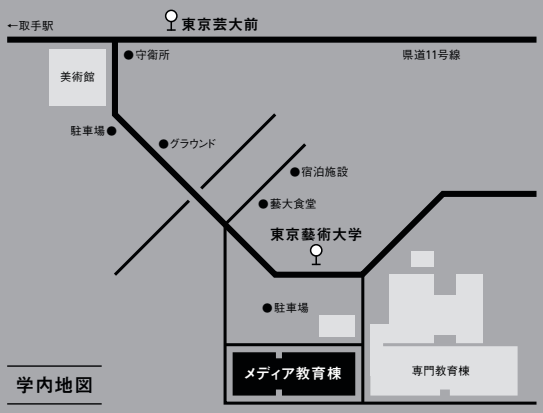
Q | 学園祭のようなものはありますか。
A | 東京藝術大学祭「藝祭」、12月に取手校地で開催される「取手藝祭」などの行事があります。

表紙掲載作品 |《演ずる造形》小野澤 峻（Create with Shoki Hattori）
2021年 / ステッピングモーター、サーボモーター 、ステンレス球、アクリルロープ、鉄

小野澤 峻 Shun Onozawa

1996年群馬県生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。ジャグリングパフォーマンスで培った身体感覚を切り口として、我々の身体や意識の深く、文化や地域を超える根源的な好奇心を刺激する現象を追求している。主な展覧会に、「Media Ambition Tokyo」（六本木・2021、渋谷・2020）、2019年「smart illumination」（横浜）、「技藝フェス tech×art festival」（渋谷）、「prize展」（取手）などがある。

広域地図



学内地図

東京藝術大学美術学部 先端芸術表現科
東京藝術大学大学院美術研究科 先端芸術表現専攻
〒302-0001 茨城県取手市小文間5000 メディア教育棟
http://ima.fa.geidai.ac.jp/

交通アクセス

［電車＋バス］JR常磐線「取手駅」東口から、大利根交通バスで約15分「東京藝術大学」または「東京芸大前」下車。［車］常磐自動車道「谷和原 I.C」から車で約45分。

東京藝術大学

東京藝術大学美術学部 先端芸術表現科 / 東京藝術大学大学院美術研究科 先端芸術表現専攻
編集・発行：東京藝術大学美術学部 先端芸術表現科　写真：鈴木理策（pp.2–3）　翻訳：荏開津 広　デザイン：森垣 賢
※本パンフレットに掲載の情報は2021年5月現在のものです。
図版および文章の無断転載を禁じます。©Department of Inter-Media Art, Tokyo University of the Arts. All rights reserved.